

今日は仕事について考えたい。3つの例をお話する。

コロナ禍は2020年の1月15日に日本で最初の感染者が確認され、4か月間で16,000人の感染者、668人の方が国内で亡くなった。あらためてこの数字を調べてみて、当時の厳しい状況が思い起こされる。県ごとに感染者数が発表されたので、他県からの人々がウイルスを持ち込まれるという不安が根強く影響し「自粛警察」と呼ばれる行動も見受けられた。

公共交通機関でも特に敏感に、マスクが正しく装着されていなかったり、咳をしていたりすると自己防衛心理が強く働き、不快感を抱く人が多くいた。通勤電車の中で軽く咳をしてただけで口論になったとニュースになった。

このような状況に心を痛めた、東京東村山市の小さなバス会社「銀河鉄道株式会社」の経営者は、新型コロナウイルス感染が拡大し始めた2020年3月12日から9月11日までの半年間、観光バスを提供して通勤客向けのバスを無料で運行した。

半年間で140本以上、2400人を都心まで送り届けた。乗客からは差し入れがあったり、温かい言葉が掛けられた。無料通勤バスが反響を呼びメディアで取り上げられるようになると、それをニュースで知った全国の人から激励や寄付が相次いだ。

塗魂ペインターズという団体があるのを知っているか。2009年、ある塗料メーカーが、何か新しい試みができないかと、塗装業者に呼びかけた。「ペンキ屋として独立したが、何か世の中の役に立てることができないか…」塗装でできる社会貢献という理念を掲げ、活動を開始した。

第1回の塗装ボランティアは、2010年3月に17社38人が参加して幼稚園の屋根をみんなで一気に塗り替えた。知名度がなく、ボランティアを申し出ても断られたりしたが、これを機に活動が軌道に乗りはじめた。

学校や地域の公共施設を無償で塗装し、地域の環境を整える。特に老朽化した施設や、再生が必要な場所に重点を置いている。地震や台風などの自然災害の際には、ブルーシートの提供や復興支援活動を実施し、被災地の状況改善に努める。

自分たちの技能を活かしたボランティアがこんなにも多くの人々を笑顔にすることを知って、塗魂ペインターズの活動はどんどん広がった。現在では200回以上のボランティア塗装が行われ、会員数は全国に300社を超えた。東日本大震災復興活動や国際プロジェクトをてがけ、塗装職人としての誇りと自信を確かなものにした集団だ。

ポール・ニューマンというアメリカの男優がいる。『明日に向かって撃て!』とか『スティング』『評決』など、1970年代から90年代に主に活躍し、映画監督としても成功した。アメリカ映画黄金期の代表的な俳優なので、世界的にも知名度が高いが、同時にアメリカではだれでも知っている食品会社、ニューマンズ・オウンの創始者としても記憶されている。

自家製のサラダドレッシングを自慢していたニューマンは1982年、友人と冗談半分で食品会社ニューマンズ・オウンを設立した。極力食品添加物を排除したフレンチ・ドレッシングやランチドレッシングは好評を博し、あるいはパスタソースやポップコーンの販売にも着手し事業拡大に成功。純利益を全額、貧困に喘ぐ子供たちに寄付している。

「収益の一部は環境保護のために役立てられています」などのメッセージを見ることがあるが、企業が環境に配慮しているかのように装う行為をグリーンウォッシュという。実際には環境に優しくない製品やサービスを、「エコ」や「持続可能性」を強調することで、消費者や投資者に好印象を与えようとする。ニューマンズ・オウンは、社会と企業の在り方についてメッセージを送り続けている。

企業が利潤をあげ、税金と給料を払い、従業員と家族の生活を守る。株価があがり、経済が発達し人々の生活が豊かになる。それは社会が成り立ち、人々が生きていく上で基本的に大切なことだ。しかし、人が働くということは、それだけではない。

働くということは、自分が生かされている、この社会に対する感謝の表現だ。働くことは社会とコミュニケーションをとりながら、自分がどのように生きていくかという態度表明そのものだ。

大学を経て、やがて社会に飛び出していく諸君。仕事とは何か考えよう。